

<研究ノート>

A病院でのB大学看護学臨地実習における 実習指導役割実施状況に関する調査 — 実習指導者・看護学教員の自己評価と看護学生の満足度から —

A survey of the role of B University's nursing practical training in A hospital;
from self-assessment of clinical nursing practice leaders and teachers, and satisfaction of nursing students

九津見 雅美¹, 富澤 理恵², 新井 祐恵³, 金田 みどり⁴, 門 千歳⁵, 福岡 富子⁶

要 旨

A病院におけるB大学看護学臨地実習について、次の2点を目的とした調査を実施した。1) 実習指導役割で規定されている役割実施に対する実習指導者・教員の自己評価と、看護学生の実習指導者・教員に対する満足度を把握する、2) 実習指導における課題を整理し、実習指導体制のあり方をよりよいものへと再構築をはかることである。調査対象はA病院の実習指導者9名、B大学のA病院での実習指導経験のある教員8名、B大学4年生の看護学生69名である。実習指導者、教員ともに実習指導における役割に対する自己評価は、学生満足度と比べ多くの項目で高かった。カンファレンスでの実習指導者・教員に対する学生満足度は、ともに約80%を超えていたことから、カンファレンスという実習指導、教員、学生の3者が集まる機会は有効に機能していることが示された。実習指導者の自己評価と学生満足度について乖離がみられたのは、「学生を暖かく受け入れる雰囲気づくり」、「学生への精神的サポート」であった。教員において乖離がみられたのは「学生の実習態度・様子の共有」であった。臨地実習にあたり、暖かい雰囲気づくりや精神的サポート、実習指導者と教員間の学生に関する情報共有を、学生が実習指導者と教員に求めていることが示された。

キーワード：実習指導役割, 実習指導者, 看護学教員, 自己評価, 看護学生の満足度

Role of nursing practical training, clinical nursing practice leader, Teacher of nursing,
Self-assessment, Satisfaction of nursing student

緒言

看護の臨地実習は、看護職者が行う実践の中に看護学生（以下学生）が身を置き、看護職者の立場でケアを行うことである。この学生過程では、学内で学んだ知識・技術・態度の統合を図りつつ、看護方法を習得する¹⁾。学生は看護の方法について、「知る」「わかる」段階から「使う」「実践できる」段階に到達させるために不可欠な過程である¹⁾。臨地実習は、看護師としての基本的な姿勢を学ぶ手段としても重要な役割を担っており、教員や看護師は学生

の学習効果が高まるよう、効果的な支援を行う必要がある²⁾。

臨地実習は看護基礎教育において必要不可欠な科目であるが、学生にとって実習はストレスが多いのも事実である。慣れないカンファレンスや実習記録、看護実践に対して、実習開始前から不安を感じていることが指摘されている^{3,4)}。看護学教員（以下教員）や医療従事者、患者、家族との関わりも、実習で感じるストレスの原因と言われている⁵⁾。学生にとってストレスの多い実習がより円滑に行われるためには、実習病院と大学が学生指導にあたって共

- 1 Masami KUTSUMI 千里金蘭大学看護学部
2 Rie TOMIZAWA 千里金蘭大学看護学部
3 Sachie ARAI 千里金蘭大学看護学部
4 Midori KANEDA 一般財団法人 住友病院 看護部
5 Chitose KADO 一般財団法人 住友病院 看護部
6 Tomiko FUKUOKA 一般財団法人 住友病院 看護部

受理日：2012年10月31日

通認識を有することが必須であると考えられる。

平成19年度にB大学に看護学部が設置され、A病院が提携病院となった。円滑に実習を進めていくために、先述したように、共通認識を有して学生指導にあたる必要がある。この必要性を鑑み、臨地実習における臨床指導者と教員の役割分担の明確化など5項目について検討することを目的とした会議体「看護教育実践検討会」が平成21～23年度の3年間組織された。その看護教育実践検討会において、「臨地実習指導における役割一覧」を平成22年6月に作成し、それに則りA病院での臨地実習をすすめてきた。平成23年度にはB大学1期生の臨地実習が終了し、それにあたり「臨地実習における実習指導役割」に関する調査を臨地実習指導者、教員、学生に対して実施することとなった。ここにその結果について報告するとともに、看護学臨地実習指導における課題整理を行い、実習役割について再考し、実習指導体制の再構築を試みることにした。

B大学看護学部のカリキュラムにおける看護学臨地実習の位置づけおよびA病院におけるB大学の看護学臨地実習

B大学看護学部における、看護学臨地実習は、1年次の基礎看護学実習Ⅰ、2年次の基礎看護学実習Ⅱ（日常生活援助）、3年次後期から4年次前期にかけて行われる領域別実習（8領域）、4年次の最終の実習として総合看護学実習と、段階的に学生が学ぶことができる構成としている。臨地実習総時間数は1,035時間（23単位）である。A病院では、このうち基礎看護学実習Ⅰ・Ⅱ、成人看護学実習Ⅰ・Ⅱ、総合看護学実習を行っている。

1. 研究目的

本研究の目的は以下の2点である。

- 1) 看護学臨地実習指導における、実習指導役割の役割実施に対する、実習指導者・教員の自己評価と、学生の実習指導者・教員への満足度を把握すること
- 2) 実習指導者・教員の実習指導役割に対する自己評価から、A病院での実習指導役割の見直しを行い、実習指導における課題を整理し、A病院とB大学の実習指導体制のあり方をよりよいものへと再構築をはかること

2. 研究方法

1) 用語の操作的定義

実習指導者：A病院における「臨地実習指導者（主任）」を実習指導者と表記する。

2) 対象者

- ①A病院での実習指導者である看護師10名
- ②A病院での実習指導経験のあるB大学看護学部教員14名
- ③領域別実習をすべて終えたB大学看護学部4年生（1期生）78名

3) 調査時期

平成23年8月

4) 調査方法

- ①実習指導者へは病棟師長を通して配布してもらい、郵送にて回収した。
- ②教員へは、学内のメールボックスを用いて配布・回収を行った。
- ③学生へは、国家試験の模擬試験日に配布し、回収箱にて回収した。

5) 質問項目

- ①実習指導者および教員への項目：性別、年齢、職位、看護学生の実習指導経験年数、実習指導役割の役割実施に対する自己評価を尋ねた。役割実施の自己評価については、4件法（「十分実施している」「やや実施している」「あまり実施していない」「全く実施していない」）で尋ね、回答を得た。
- ②学生への項目：性別、年齢、実習指導者・教員への実習指導役割に対する満足度を尋ねた。満足度については、4件法（「十分満足している」「やや満足している」「あまり満足していない」「全く満足していない」）で尋ね、回答を得た。

実習指導役割の実施状況の項目は、A病院看護部ならびにB大学看護学部で平成21年4月より組織された看護教育実践検討会において作成された『臨地実習指導における役割一覧（平成22年6月作成）』から抜粋した（表1）。抜粋にあたっては「臨地実習指導者（主任）」と「日々の指導者」、「教員」の役割の項目のうち、実習中の役割に含まれる表2に示す18項目を選択した。

看護学実習指導役割実施状況に関する調査

表1 臨地実習指導における役割一覧

	臨地実習指導者（主任）	日々の指導者	教 員
A 病 院	1. 実習指導者としての役割を担い実習における調整・指導を実施する 1) 実習前受け入れ準備 ①教員との話し合いを持ち実習内容把握 ②師長との情報交換 ③学生のレディネス把握 ④受け持ち患者選定・患者・家族への同意 ⑤スタッフへ実習に関して周知 ⑥実習受け入れ環境整備 2) 実習中 ①受け持ち患者の紹介 ②実習オリエンテーション ③実習中における指導調整（患者・スタッフや教員間） ④実習指導 ⑤カンファレンス参加・助言・指導 ⑥学生への精神的サポート ⑦学生反省会参加 3) 実習後 ①病院内部における実習指導評価・患者選定・環境、指導内容等 ②次回実習指導課題の明確化 2. 実習指導者の育成 1) 実習指導者連絡会への参加 2) 研修企画・参加（ラダー2） 3. インシデント時対応	1. 充実した実習ができるよう、役割モデルの実践を行う 1) 患者へのベッドサイドケアを通した看護ケアの指導 ①当日の実習計画への助言（学生から報告を受け、ともに個別的な看護を考える） ②患者へのケアは学生とともに学生の技術・能力に合わせ、実施 ③学生の実習の態度や様子を臨地実習指導者や教員に連絡 ④必要に応じて学生のカンファレンスに参加し、助言を行なう ⑤学生を暖かく受け入れる雰囲気をつくる 2. インシデント時対応	1. 対象者及び学生にとって実りある実習にするために、臨地実習指導者・日々の指導者と協働して指導にあたる 1) 実習前 ①実習目標・実習目的の明確化（実習要項の作成） ②実習内容や方法に関する臨地実習指導者と周知徹底した打ち合わせ ③患者選定及び同意書の依頼 ④決定患者の情報収集 ⑤教育上必要と思われる個々の学生に関する情報の交換 ⑥学生への実習前オリエンテーション ⑦実習時に必要な使用物品を含めた実習環境の調整 2) 実習中 ①学生が看護に必要な情報収集、解釈、問題の予測・確認・明確化、計画立案、実施、評価という一連の看護過程を展開する際の指導 ②カンファレンスの効果的な指導 ③臨床側と学生との調整 ④学生への精神的サポート ⑤円滑に実習を進めるための臨地実習指導者との密接な連絡・調整 3) 実習後 ①実習記録の補足指導 ②学生の実習評価・成績提出 ③看護技術チェックリストの評価 ④実習全体の評価及び次年度への課題の明確化 2. 実習指導者連絡会議への参加 1) 前実習のまとめを報告する。 2) 学生の効果的な学びに向けた課題の検討 3. インシデント時対応
	B 大 学		

平成22年6月 看護教育実践検討会作成

6) 分析方法

記述統計にexcel2010を用いた。

なお、実習指導者・教員の実習指導役割に対する自己評価は、「十分実施している」「やや実施している」の回答を合算した割合を示した。また、学生の実習指導者・教員への満足度は、「十分満足している」「やや満足している」の回答を合算した割合を示した。実習指導者・教員の自己評価と学生の満足度を比較検討した。

7) 倫理的配慮

本研究はB大学看護学部倫理委員会の承認および

A病院看護部長の同意を得た。研究への参加は自由意志に基づくこと、また参加しない場合に何の不利も被らないことを説明した。特に、回答は個人が特定できるものではなく、研究以外の目的に使用し得ないことを強調した。さらに、データの厳重な管理、プライバシーの保護について保障した。なお、回答をもって、同意を得られたものとみなした。

3. 結果

1) 分析対象者の属性

①A病院で実習指導者である看護師10名を調査対

表2 実習指導における役割の実施状況とその評価

	実習指導者の役割	教員の役割
(1) 受け持ち患者の紹介をしていたか	○	
(2) 実習オリエンテーションをしていたか	○	
(3) 円滑に実習を進めるための連絡および指導調整をしていたか (患者・スタッフ・教員に対する調整)	○	○
(4) 当日の実習計画への助言 (学生から報告を受け、一緒に患者の個性に合わせた看護を考える) の実施をしていたか	○	
(5) 患者へのケアに関して、学生とともに学生の技術・能力に合わせていたか	○	
(6) 学生の実習の態度や様子を臨地実習指導者 (主任) や教員と共有していたか	○	○
(7) 学生を暖かく受け入れる雰囲気をつくっていたか	○	
(8) 学生が看護に必要な『情報収集』の指導を行っていたか		○
(9) 学生が看護に必要な『情報の解釈』の指導を行っていたか		○
(10) 学生が看護に必要な『問題の予測・確認・明確化』の指導を行っていたか		○
(11) 学生が看護に必要な『計画立案』の指導を行っていたか		○
(12) 学生が看護に必要な『ケアの実施』の指導を行っていたか		○
(13) 学生が看護に必要な『評価』の指導を行っていたか		○
(14) 学生が『一連の看護過程を展開』する際の指導を行っていたか		○
(15) 学生への精神的サポートを行っていたか	○	○
(16) 必要に応じて日々の学生カンファレンスに参加し、助言・指導を行っていたか		○
(17) 中間カンファレンスに参加し、助言・指導を行っていたか		○
(18) 最終カンファレンスに参加し、助言・指導を行っていたか	○	○

注：○印は、表1において各々の役割とされているものである。

象とし、9名から回答を得た (回収率90.0%)。臨床経験年数の平均は16.2年、看護学生の実習指導経験年数は9.1年であり、教育に関する研修経験者は3名 (33.3%) であった。

- ②A病院での実習経験のあるB大学看護学部教員14名を調査対象とし、8名から回答を得た (回収率57.1%)。看護学生の実習指導経験年数の平均は3.6年であり、看護協会などが主催する教育に関する研修経験者は1名 (12.5%) であった。
- ③領域別実習を終えたB大学看護学部4年生 (1期生) 78名を調査対象とし、69名から回答を得た (回収率88.5%)。21 - 22歳がほとんどであった。なお、実習指導者、教員、学生すべて性別は女性であった。

2) 実習指導者・教員の自己評価と学生の満足度

(1) 実習指導者の実習指導役割に対する自己評価 (図1)

「患者・スタッフ・教員に対するの連絡・指導調整」「患者へのケアを、学生の技術・能力に合わせていたか」「学生を暖かく受け入れる雰囲気づくり」

の3項目は、100%実施していると実習指導者は自己評価していた。最も自己評価が低かったのは「学生への精神的サポート」で55.6%であった。

(2) 教員の实習指導役割に対する自己評価 (図2)

「患者・スタッフ・教員に対するの連絡・指導調整」「学生の実習態度・様子の共有」「『情報の解釈』の指導」「『問題の予測・確認・明確化』の指導」「『計画立案』の指導」「『評価』の指導」「『一連の看護過程を展開』する際の指導」「日々の学生カンファレンスへの参加、助言・指導」「最終カンファレンスへの参加、助言・指導」の9項目は、100%実施していると教員は自己評価していた。

(3) 実習指導者に対する学生の満足度 (図1)

満足という割合が高かったのは、「最終カンファレンスへの参加、助言・指導」で98.6%、次いで「実習オリエンテーション」97.2%、「中間カンファレンスへの参加、助言・指導」94.2%であった。満足割合が低かったのは「学生の精神的サポート」20.2%、「学生を暖かく受け入れる雰囲気作り」37.2%であった。

(4) 教員に対する学生の満足度 (図2)

満足という割合が高かったのは、「最終カンファ

看護学実習指導役割実施状況に関する調査

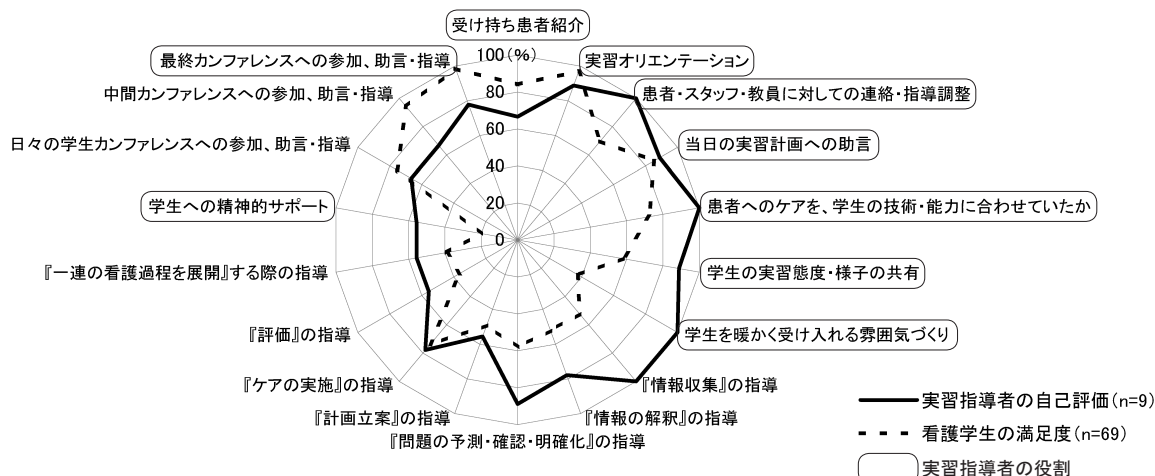


図1 実習指導者の実習指導役割に対する自己評価と学生の満足度

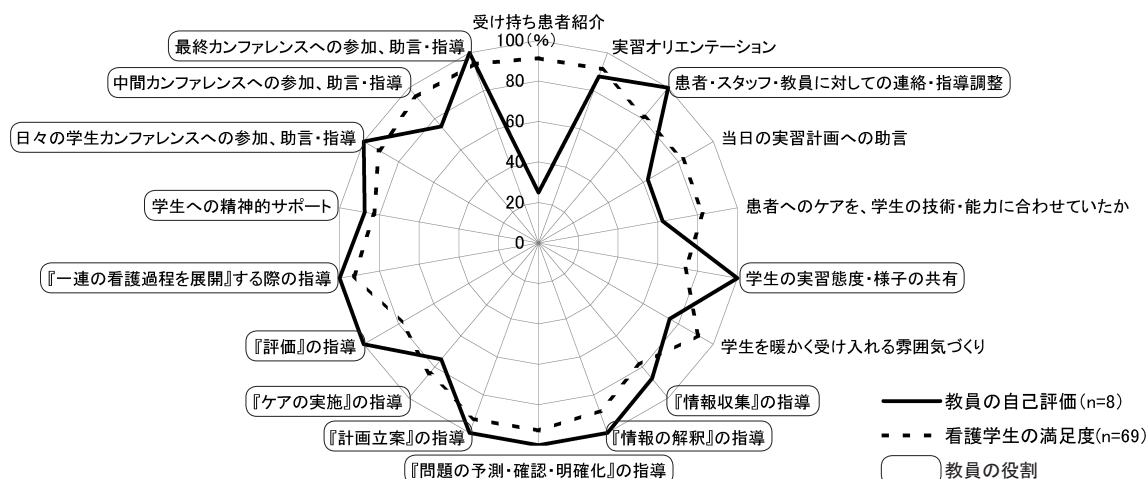


図2 教員の実習指導役割に対する自己評価と学生の満足度

レンスへの参加、助言・指導」94.2%と、「中間カンファレンスへの参加、助言・指導」94.2%の2項目であった。満足割合が低かったのは「学生の実習態度・様子の共有」で73.9%であった。

3) 実習指導役割の実施に対する実習指導者・教員の自己評価と学生の満足度の比較

(1) 実習指導者の自己評価と学生の満足度 (図1)

ほとんどの項目において、学生満足度が実習指導者の自己評価と比べ低く、実習指導者の役割とされている項目9項目のうち6項目が、学生満足度が実習指導者の自己評価よりも低かった。具体的には、「患者・スタッフ・教員に対するの連絡調整」は30.4ポイント、「当日の実習計画への助言」は3.4ポイント、「患者へのケアを、学生の技術・能力に合わせ

ていたか」は27.5ポイント、「学生の実習態度・様子の共有」は31.0ポイント、「学生を暖かく受け入れる雰囲気づくり」は62.3ポイント、「学生への精神的サポート」は35.4ポイント、学生満足度が実習指導者の自己評価よりも低かった。

実習指導者の役割のうち、学生満足度が実習指導者の自己評価より高かったのは3項目であった。具体的には「受け持ち患者紹介」は17.4ポイント、「実習オリエンテーション」は8.3ポイント、「最終カンファレンスへの参加、助言・指導」は20.8ポイント、実習指導者の自己評価が、学生満足度より高かった。

また、実習指導者の役割ではない項目のうち2項目が、学生満足度が実習指導者の自己評価より高かった。具体的には、「日々の学生カンファレンス

への参加、指導・助言」は8.7ポイント、「中間カンファレンスへの参加、指導・助言」は27.5ポイント高かった。

(2) 教員の自己評価と学生の満足度 (図2)

教員の役割とされている13項目のうち11項目が、学生満足度が教員自己評価より低かった。具体的には、「患者・スタッフ・教員に対しての連絡・指導調整」は18.8ポイント、「学生の実習態度・様子の共有」は26.1ポイント、「『情報収集』の指導」は9.3ポイント、「『情報の解釈』の指導」は11.6ポイント、「『問題の予測・確認・明確化』の指導」は7.2ポイント、「『計画立案』の指導」は7.3ポイント、「『評価』の指導」は21.7ポイント、「『一連の看護過程を展開する際の指導』」は7.3ポイント、「学生への精神的サポート」は4.9ポイント、「日々の学生カンファレンスへの参加、助言・指導」は8.7ポイント、「最終カンファレンスへの参加、助言・指導」は5.8ポイント、学生満足度が教員自己評価より低かった。

教員の役割で、学生満足度が高かったのは2項目であり「『ケアの実施』の指導」は9.1ポイント、「中間カンファレンスへの参加、助言・指導」は19.2ポイント、教員の自己評価と比べ学生満足度が高かった。

また、実習指導者の役割ではない項目のうち4項目が、学生満足度が実習指導者の自己評価より高かった。具体的には、「実習オリエンテーション」は3.8ポイント、「当日の実習計画への助言」は20.1ポイント、「患者へのケアを、学生の技術・能力に合わせていたか」は20.1ポイント、「学生を暖かく受け入れる雰囲気づくり」は16.3ポイント高かった。

実習指導者と教員に対する学生満足度を比べると、「実習オリエンテーション」および「最終カンファレンスへの参加、助言・指導」の項目において、実習指導者への満足度が高かった。

4. 考察

1) 学生満足度の高い項目に関する考察

—役割実施がなされていると学生に評価された項目—

カンファレンスに対する学生満足度は、実習指導者・教員ともにおおむね80%を超えていた。カンファレンスという教育方法は、施設の看護職者が学生の考えを直接知り、理解することにより、臨地実習教育目標の理解を深め、さらには学習内容や到達度を把握・評価できるまたとない効果的な教育場面

となる¹⁾。これらの教育方法の展開の結果、実習施設の看護職者と教員と学生の三者の双方向での教育の波及効果が出現する¹⁾。カンファレンスという実習指導、教員、学生の三者が集まる機会は、学生の実習過程において有効に機能していることが示された。

2) 実習指導における役割実施状況の自己評価と学生の満足度との乖離の大きさに着目した考察

実習指導者の自己評価と学生の満足度との間で乖離が最も大きかったのは「学生を暖かく受け入れる雰囲気づくり」であり、次いで「学生への精神的サポート」、「学生の実習態度・様子の共有」であった。

学生は無関心な態度や否定されたと感じる体験をすることで、実習に取り組む意欲が低下したり、態度が萎縮することも報告されている⁶⁾。これらは、実習における人的環境が学生の学習成果に与える影響が大きいことを意味しており、学生に対する指導者の関わりは非常に重要である²⁾。緊張度の高い学生が円滑に実習を行うためには、実習環境や精神面への配慮も重要な役割となる⁷⁾ため、暖かい雰囲気づくりや精神的サポートについては意識して取り組んでいく必要性が示されたと考える。

教員の自己評価と学生の満足度について乖離が最も大きかったのは「学生の実習態度・様子の共有」であった。この項目は実習指導者においても乖離がみられたことから、学生は実習指導者や教員が、学生である自分たちのことを共有してくれていないと捉えていることが推察された。

学生は実習のみの関わりである看護師に理解を求めても限界があることを認識し、教員に対し良き理解者であることを求めている²⁾と指摘されていることから、教員は実習指導者と学生との架け橋役も担う必要がある。これについては、実習指導者においても、教員と学生の架け橋役を担う必要が生じることもあると考えられる。

教員の役割である情報収集、情報の解釈、問題の予測・確認・明確化、計画立案の指導、一連の看護過程を展開する際の指導について、学生満足度が教員評価より低かった。このことから教員の実習指導に対する指導が不足していることが考えられた。学生は刻々と変化する患者の状況や様々な情報にうまく対応ができずに戸惑うことも多く、「学習の必要性や学習目標を明確に示す」等の、その時の学生の

看護学実習指導役割実施状況に関する調査

状況に適した助言や指導内容を教員に求めていると思われると藤本ら²⁾が報告していることと一致していると考えられた。

実習の最終的責任は、大学の教員にあることは当然であり、教員は、学生の行動と学習状況を把握し、教育的配慮に焦点をあてて指導を行う¹⁾。これに対して、現地の看護職は実習指導者として対象者のケアに責任を持ち、対象者に焦点をあてた立場で学生指導にあたる¹⁾。両者を踏まえ、より良い看護の臨地実習の体制をつくっていくためには、双方の

後輩育成に関する連携と目的意識の共有が重要となる¹⁾ことから、今回得られた結果を踏まえて実習指導役割の改訂を行い、周知徹底を行う必要がある。

5. 実習指導体制の再構築に向けての具体策

3. 2) で得られた結果を踏まえ、A病院、B大学ともに、実習指導役割について、看護教育実践検討会において検討を重ね、「臨地実習指導における役割一覧 改訂版」を作成した(表3)。

改訂にあたり、本報告では実習指導者と表記して

表3 臨地実習指導における役割一覧 改訂版

	臨地実習指導者(主任)	日々の指導者	教員
A 病 院	1. 実習指導者としての役割を担い実習における調整・指導を実施する 1) 実習前受け入れ準備 ①教員との話し合いを持ち実習内容把握 ②師長との情報交換 ③学生のレディネス把握 ④スタッフへ実習に関して周知 ⑤実習受け入れ環境整備 2) 実習中 ①受け持ち患者を教員・学生に紹介 ②実習オリエンテーション ③患者へのベッドサイドケアを通した看護ケアの指導(日々の指導者の①～⑤含む) ④日々の指導者に対する実習指導 ⑤カンファレンス参加・助言・指導 ⑥学生への精神的サポート ⑦学生の学びの会参加 3) 実習後 ①病院内部における実習指導評価・患者選定・環境、指導内容等 ②次回実習指導課題の明確化 2. 実習指導者の育成 1) 実習指導者連絡会への参加 3. インシデント時対応	1. 充実した実習ができるよう、役割モデルの実践を行う 1) 患者へのベッドサイドケアを通した看護ケアの指導 ①当日の実習計画への助言(学生から報告を受け、ともに個別的な看護を考える) ②患者へのケアは学生とともに学生の技術・能力に合わせ、実施 ③学生の実習の態度や様子を臨地実習指導者や教員に連絡 ④必要に応じて学生のカンファレンスに参加し、助言を行なう ⑤学生を暖かく受け入れる雰囲気をつくる 2. インシデント時対応	1. 対象者及び学生にとって実りある実習にするために、臨地実習指導者・日々の指導者と協働して指導にあたる 1) 実習前 ①実習目標・実習目的の明確化(実習要項の作成) ②実習内容や方法に関する臨地実習指導者と周知徹底した打ち合わせ ③患者選定の依頼 ④決定患者の情報収集 ⑤臨地実習指導者と教育上必要と思われる個々の学生に関する情報の交換 ⑥学生への実習前オリエンテーション ⑦実習時に必要な使用物品を含めた実習環境の調整 2) 実習中 ①患者への実習の説明と同意を得る(説明・同意書を渡しサインをもらう) ②実習内容や方法に関する臨地実習指導者と周知徹底した打ち合わせ ③カンファレンスの効果的な指導 ④臨床側と学生との調整 ⑤学生への精神的サポート ⑥円滑に実習を進めるための臨地実習指導者との密接な連絡・調整 ⑦学びの会への効果的な指導 3) 実習後 ①実習記録の補足指導 ②学生の実習評価・成績提出 ③看護技術チェックリストの評価 ④実習評価後、追課題のある学生への指導 ⑤実習全体の評価及び次回への課題の明確化 ⑥学生の効果的な学びに向けた課題の検討 2. 実習指導者連絡会議への参加 1) 前実習のまとめを報告する 3. インシデント時対応
	B 大 学		

平成22年6月 看護教育実践検討会作成
平成23年12月 修正

いる臨地実習指導者（主任）の役割に、日々の指導者の役割を包含することとした。また、臨地実習指導者（主任）は教員と実習の調整を行い、臨地実習を包括的な立場から指導していることを踏まえ、日々の看護師に対する実習指導を新たな役割として取り入れた。また教員においては、実習内容や方法に関して臨地実習指導者と徹底した打ち合わせを役割として組み込んだ。

以下に、A病院、B大学それぞれの具体的な取り組みについて記述する。

1) A病院における取り組み

実習指導者の自己評価と学生の満足度の結果を、師長会および主任会で公表し、何が問題であるのかを話し合った。

その結果、指導環境の整備、学生の実習に直接関与する卒後3～4年目の看護師に対する教育が必要であることが再認識された。

そこで、現在のラダー教育の中で卒後3年目看護師対象の「学生指導研修」の時期を見直し、1年早めて2年目の後期に変更した。

また、実習期間中は臨地実習指導者である主任が必ず日勤で勤務し、常に担当教員と情報交換しながら学生の精神的なサポートがおこなえるように配慮することとした。

2) B大学における取り組み

A病院実習前の学生に対して、レディネス把握のために、①未実施の看護技術の把握、②未実施の技術について学内での自己学習の促し、③実習予定病棟で実施できそうな看護技術項目について学生への指導、を実施するようにした。これにより学生の実習に対する不安が少しでも軽減され、円滑に実習導入ができるようになると考えられる。また他施設での実習状況に関する情報収集を行い、事前に学生指導上留意事項があれば実習指導者と共有するように努めた。

また、平成24年度には「(仮) グループダイナミクスを利用した教育方法」というタイトルで講師を招聘し、教員に向けてのFD活動を行う予定である。このように教育方法について学びを深めながら、教員も常に自己研鑽に努め、学生の実習指導に取り組むことの重要性が確認された。

6. 結論

1. 実習指導者の実習指導役割に対する学生の満足度は、実習指導者自己評価と比べ、多くの項目で低かった。同様に、教員の実習指導役割に対する学生満足度も、教員自己評価と比べ、多くの項目で低かった。
2. 実習指導役割の中で100%実施していると回答された項目は、実習指導者では「患者・スタッフ・教員に対しての連絡・指導調整」「患者へのケアを、学生の技術・能力に合わせていたか」「学生を暖かく受け入れる雰囲気づくり」の3項目であった。教員では「患者・スタッフ・教員に対しての連絡・指導調整」「学生の実習態度・様子の共有」や看護過程展開に関する項目、学生カンファレンスでの指導など9項目であった。
3. 実習指導者の自己評価と学生満足度について乖離が最も大きかったのは、「学生を暖かく受け入れる雰囲気づくり」、次いで「学生への精神的サポート」であった。教員の自己評価と学生満足度について乖離が最も大きかったのは「学生の実習態度・様子の共有」であった。
4. カンファレンスに対する学生満足度は、実習指導者・教員ともにおおむね80%を超えていた。

7. 研究の限界と今後の課題

本研究は一病院を対象としているため一般化には限界がある。しかし、本研究はA病院とB大学がともに臨地実習指導体制を構築し、学生指導にともにあたっていた過程を振り返り、引き続き行われる臨地実習指導における役割の整理の一助とすることができたと考えられる。また看護学臨地実習では、領域によって看護の役割や特徴が異なることが推測される。本研究はA病院での看護学実習を総括した分析結果であり、領域別による検討が求められる。

今後の課題としては、次の2点があげられる。付属の実習病院を持たないB大学にとって、提携病院であるA病院とともに、質の高い臨地実習を行うために実習指導にあたって共通認識を持って相互に取り組むこと、また1期生をA病院に送り出した現在、A病院における継続教育に積極的に関与していくことである。

8. 謝辞

本研究の実施にあたり、お忙しい中、ご協力くださいました住友病院の実習指導者の皆様、千里金蘭大学看護学部教員の皆様、千里金蘭大学看護学部4年生（平成23年度）の皆様にご心より感謝申し上げます。

本研究は、平成23年度千里金蘭大学看護学部特別研究Aの助成を受けた研究の一部である。

9. 引用文献

- 1) 文部科学省, 臨床実習指導体制と新卒者の支援 http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/018/gaiyou/020401c.htm
- 2) 藤本裕二ほか, 看護学生が臨地実習において教員および看護師に求める資質と能力 保健学研究 23(1), 9-16(2011)
- 3) 佐藤公子, 実習前の不安が学生のストレス・コーピングと心理状態に与える影響について基礎実習Ⅱの開始前・後のアンケート調査からの考察 臨床看護 33(10), 1512-1515(2007)
- 4) 山川裕子ほか, 看護学生の実習不安と懇話会の意義 日本看護学会論文集 看護教育 35, 205-207(2004)
- 5) 勝原裕美子(監訳), 臨地実習のストラテジー, 医学書院, 東京 57-58(2002)
- 6) 田村美子ほか, 看護学生が臨床指導者から受ける否定的ケアリング体験 看護教育 45(9), 748-752(2004)
- 7) 渡部菜穂子ほか, 看護学実習における臨地実習指導者の「看護実践の役割モデル」の認識 弘前学院大学看護紀要 6, 1-10(2011)